

## 名勝指定 100 周年記念事業

講演会「栗林来園と歴代藩主—瀬戸の都に咲いた華—」

日時 令和 4 年 12 月 11 日(日曜日)13:00~14:30

会場 栗林公園商工奨励館北館

講師 平井二郎氏、村井眞明氏、田中哲也氏

コーディネーター 栗林公園観光事務所 谷久

受講者 110 名

(谷久)

みなさま、こんにちは。今日も栗林公園に御来園ありがとうございます。  
栗林公園観光事務所の谷久と申します。本日、拙いながら司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

栗林公園は 1922 年大正 11 年 3 月 8 日に国の名勝に指定されてから本年度 100 周年を迎えました。

名勝指定 100 周年を記念しての事業を考えておりましたところ、日ごろ栗林公園が非常にお世話になっている平井二郎様よりお仲間の村井眞明様、田中哲也様とご一緒に「栗林公園の本を執筆している」とのお話をいただきまして、ぜひそのお話を聞かせていただこうということで、この度の講演会となったわけです。

それでは、まずは本日の講師の方々のご紹介をさせていただきます。

栗林公園の新しい歴史観光読本ができました。11 月 30 日、出来立ての新刊でございます。「栗林公園と歴代藩主—瀬戸の都に咲いた華—」の監修をなさった平井二郎様です。香川証券株式会社代表取締役社長、同会長を経て、現在は高松市文化協会会長として地元の文化振興にご尽力されています。栗林公園をこよなく愛されている方でございます。

次に、この本を執筆された村井眞明様です。元香川県職員で観光部局のトップ、観光交流局長もなさっておられました。歴史に造詣の深い方で地元の歴史に関しての講演や執筆を数多くなさっており「歴史ライター」とご紹介させていただきます。

3 人目の方はこの本の編集をされた田中哲也様です。元西日本放送ラジオセンター長で放送のお仕事に携わってこられた方で、栗林公園の特別番組を作られるなど栗林公園に思い入れのある方と伺っております。

どうぞよろしくお願いたします。

それでは、ここからシンポジウム方式で進めてまいります。

私はこの本を手にとりましてから非常に面白くて一気に読み上げたところですよ。

先程お三人のご紹介をさせていただきましたが、平井さんは経済界、村井さんは公務員、田中さんはマスメディアとそれぞれ違うジャンルにいらっしやう方、お歳も平井さんが90歳、村井さんは70代、田中さんは60代と同級生でもない。では、どのような経緯があつて3人で協力されて1冊の本を作られることになったのでしょうか。きっかけ、動機、経緯をお聞かせいただけますでしょうか。

(田中氏)

20年も前のことですが、私がラジオを担当することになった時に、テレビとの差を出すために桃太郎の話をラジオ放送しようと考えました。その時に平井先生に相談したことがきっかけで知り合い、その後、以前栗林公園の所長をしていた那須さんから県庁において、桃太郎の話をしたいと頼まれましたが、その時の観光交流局長であったのが村井さんでした。これが私達三人の出会いであり、三人で何かしようと話し合ったときに、栗林公園の本を作成しようということになりました。

(谷久)

年代を超えた20年来のご友人ということですね。栗林公園が縁を取り持ったといわせていただけてよろしいですね。

村井さんにお聞きしたいのですが、この本ですけれど、大きく歴史編と庭園編の2部構成になっていますが、このような構成にされた意図は何でしょうか。

(村井氏)

栗林公園関係の本では景観等のビジュアル系の冊子が多いのではないかと思います。しかし、栗林公園は歴代藩主が長年にわたりお庭造りに携わっていることから、時間軸としての歴史的側面による説明と庭園としての平面的説明の2通りの説明が必要であると考え、二部構成としました。実際に、栗林公園関係の他の冊子でもそのようにしているものがあります。

(谷久)

栗林公園に関する本ですけれども、主なところでは昭和7年、赤松景福の「栗林公園誌」、昭和47年藤田和重の「栗林公園」、最近では平成27年の羽野茂雄氏の「一步一景 栗林公園を訪ねる」などがあります。例えば「一步一景 栗林公園を訪ねる」は、栗林公園をいろいろな角度から50回にわたって新聞連載したものといたったふうにそれぞれ特色がありますが、この本にはどのような特色があるとお考えですか。

(田中氏)

栗林公園には視覚的な美しさがあるのは当然のことですが、その背景には生駒家及び松平家五代にわたり、歴代の藩主が相当な私財を費やしたうえで築庭されたということ、この本では表現することができたと考えています。

アメリカの雑誌では、世界一の日本庭園として、島根県の足立美術館を評価しているものもありますが、私は、栗林公園こそが足立美術館を超えた日本一の庭園だと思っています。そのため、そのことを説明する必要がありますが、この本によってそれができたと考えています。

明治時代、国内指折りの庭園家である小沢圭次郎は、荒れていた栗林公園ですら「素晴らしい公園だ」と褒めたたえた程です。

(谷久)

栗林公園を知るには歴史的視点が必要であり、成り立ちを知るには江戸時代の中期に書かれた「栗林荘記」が必要であり、当時の人たちの感性を知るには「栗林園二十詠」「栗林二十境」が必要になりますが、この3つの難解な漢文の現代語訳をされたということで、これは初めてじゃないでしょうか。

そして、「平井栗林学」ということですね。

「平井栗林学」によりますと西嶋八兵衛が栗林荘の築庭一庭造りを計画・実行したということで、その辺の事情は、本の25ページから27ページにこのように書かれています。

【この庭園は生駒高俊の時代に築庭が始まったと考えられているが、高俊は若年で庭園に興味を有していたという記録も無く、誰が何時造ったかは不明であるとするのが一般的な説である。しかし、平井二郎は、栗林荘は、西嶋八兵衛が主導してその采配の下に寛永8年（1631年）に築庭が構想されたと考えている。その理由は次のようなものである。

まず第1点は、西嶋八兵衛は藤堂高虎の腹心であり、生駒家に対し大きな発言力を持っていたことである。すなわち、八兵衛の妻は高虎の姉の子つまり姪に当たり、その実兄は藤堂高経といい藤堂家の重臣であった。つまり、八兵衛はただの藤堂家家臣ではなく、藤堂家の身内ともいえるべきもので、藤堂高虎の代理人として生駒藩へ派遣されていたということである。寛永7年(1630年)に高虎は死去しているが、高虎の養女である生駒正俊の未亡人(高俊の母)は生存しており、八兵衛は高俊の母から強い信頼を得ていたものと考えられる。したがって、八兵衛はただの生駒家客臣の土木家ではなく、生駒家に対して自分の意見を述べることのできる重臣であった。

第2点は、生駒家と西嶋八兵衛は小堀遠州と親密な交友関係があったことである。小堀遠州は、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた大名で、慶長5年(1600年)から元和5年(1619年)まで備中高梁の松山城主1万5千石、その後20年余り伏見奉行職にあった。武人であるが、建築/造園に才能をあらわすとともに茶・和歌・書などに造詣の深い文化人でもあった。そして、遠州は、藤堂高虎の養女(栄光院)を妻に娶っていた。生駒三代藩主・正俊の妻も藤堂高虎の養女であり、生駒家と小堀家は親戚どうしであった。また、西嶋八兵衛も高虎の姪を娶っており、三者は藤堂家を通じて結びついていた。

第3点は、小堀遠州が京都で仙洞御所の作庭に携わっていた頃、西嶋八兵衛が遠州と合っていたことである。京都御所の南東にある仙洞御所は、幕府が後水尾天皇の譲位を予定して小堀遠州を奉行として寛永4年(1627年)に造営に着手し、同7年(1630年)に完成したものである。この間の同6年(1629年)、遠州は江戸城西の丸の新庭造りを指揮するよう幕府に召されて江戸へ赴いている。また、この年、西嶋八兵衛は、江戸神田用水工事の打ち合わせのために幕府に召されて讃岐から江戸へ赴いている。この時、親戚同士の両人が合わないはずがなく、八兵衛は遠州から仙洞御所の作庭について話を聞いたのであろう。また、桂離宮の造営は元和元年(1615年)頃に始まり寛永元年(1624年)頃に作庭も含めて一応完成をみているが、この作庭は遠州の義弟(妻は遠州の妻の妹)である中沼左京が携わったともいわれ、遠州から桂離宮の庭園のことも聞いていたと思われる。

以上のようなことから、平井二郎は、西嶋八兵衛が、寛永8年(1631年)に香東川改修工事に着手した時に、未亡人であった三代正俊の正室(四代高俊の母)に紫雲山東麓における庭園づくりを進言してその同意を得て計画し、小堀遠州の庭園思想に基づいて自分が実際に指揮して築庭したのと考えている。】

その辺りを詳しくご説明いただけますでしょうか。

(平井氏)

栗林公園は小堀遠州の妻、生駒正敏の妻及び西嶋八兵衛の妻の藤堂家を通じて結びついた女三姉妹により造り上げられた庭園であると考えています。

(来場者に配付した仙洞御所の図面を見ながら)

栗林公園と京都仙洞御所は、両園を比べた時に、南湖に3つの島があり、仙磯もあるなど庭園の造り・特徴がそっくりです。高松高校の同級生が京都御所の庭園の管理責任者をしていた関係から、京都御所をよく訪れ、小堀遠州が書いたという仙洞御所の計画図も見て、それが栗林公園の南湖の3つの島の配置、仙磯の岩などの景観とそっくりなことに驚きました。

西嶋八兵衛は江戸から讃岐へ戻る途中、京都に立ち寄り、小堀遠州の紹介により、仙洞御所の庭園を見たものと推測していますが、そのように考えれば、栗林公園の南湖一帯は、京都の仙洞御所の庭園との類似性が指摘され、小堀遠州の造園思想の影響を受けたのではないかとされていますが、至極当然のことだと思えます。

(谷久)

西嶋八兵衛は400年以上放置されていた満濃池を復旧したり各地で新田開発をしたりと、讃岐の地で大活躍をされた人物ですが、なぜ、ここに栗林荘を作ったのでしょうか。

これについては本の25ページにこう書かれています。

【香東川の一本化により、東水流の旧河道に川の水は流れなくなったものの豊富な伏流水(砂礫層を流れている浅い地下水)が湧出し、その結果として、紫雲山東麓にある従来の東水流の河床には、大きな水溜まりができたものと思われる。今の栗林公園の西湖はその名残という。しかも、この地は、紫雲山を背景としていることから、庭園の立地条件として最適の土地であった。

こうして、紫雲山東麓の水溜まりや豊富な伏流水などを利用して、今の公園の小普陀付近、南湖、西湖の辺りにおいて、香東川の旧河床の砂礫の中に築き島を作って栗林公園につながる庭造りが始められたものと思われる。】

この辺りを詳しくご説明いただけますでしょうか。

(村井氏)

香東川の流れを西側に一本化した時に、この辺りには水たまりができていたと思われます。しかし、砂礫層であったため耕作地としては不適切な土地であったため田畑に利用されず、背景に紫雲山があり景観が優れていることや、戦乱が

落ち着いた日本庭園の築庭ブームでもあったことなどにより、この場所に築庭しようということになったのだと思います。

室町時代の豪族である佐藤氏も小普陀あたり築庭していることから、紫雲山を背景としたこの土地は日本庭園造りに適した土地だったのでしょうか。

(田中氏)

西嶋八兵衛は、この土地の水の流れが東から西へ、南から北へと流れていたため、風水に適していたことや、紫雲山は稲荷山と室山の2つの山から成り立っていますが、この風景が二神山という信仰の原風景を連想させることから、この2点より日本庭園に適した土地だと考えたのではないかと思います。

(平井氏)

紫雲山を境に東西の香東川の流れを西に一本化したために、東側のこの辺りは、伏流水が豊富でしたが、この伏流水による洪水も多く起こっていたと思われます。それを防ぐためにも、栗林公園が築庭されたのではないかと思います。

(谷久)

それまで氾濫を繰り返していた香東川の改修事業によってできたものなのですね。園路に河川敷の後であったことを物語る丸い石が見られます。

栗林公園がここにある理由の一つには、背景となっている紫雲山がここにあることもあると思います。

(谷久)

平井さんは、西嶋八兵衛はどのような人物だったと思われますか。

(平井氏)

歴史にも詳しく、中国の治水にも詳しい人物であり、藤堂高虎のお城造りにも携わっているような万能の人物であったのではないかと思います。

(谷久)

まさにスーパーマンでありアイデアマンであり凄い方だったのですね。香川県にとっての大恩人です。

さて、この栗林荘、完成までに100年以上の歳月をかけて高松松平藩五代頼恭公のときに完成したといわれていますが、そのころの栗林荘の姿は現在と比べてどのようなどころが異なっているのでしょうか。

(村井氏)

南庭の景観の変化についてですが、現在の栗林公園の南庭は、五代頼恭の頃の景観と比べて大きく変化したところもあります。詳細は「栗林公園と歴代藩主」を参照していただきたいと思いますが、そのあらましを書いた文書を読み上げます。

【建物】 栗林荘記が書かれた当時、吹上に「考槃亭」、西湖畔に「憂玉亭」、南湖北岸の旄丘頂上の脩然台に「栖霞亭」という三か所の小茶亭があった。その後、頼恭は考槃亭を会僊巖の東の地へ移築し、名称も「日暮亭」と改めた。また憂玉亭を今の講武榭の辺り(扇屋原)に移した。憂玉亭のあった地には今も遺構として降躰踞が残っている。

明治初めに、これら三小茶亭はすべて廃されたが、日暮亭(元考槃亭)は解体された後、中野町の民間人に譲渡され、園外で再築された。その後、明治31年(1898)1月、日暮亭(元考槃亭)が撤去された跡地に現在の「日暮亭」が再建された。一方、民間の手に渡っていた日暮亭(元考槃亭)の建物は、昭和20年(1945)5月、有志の尽力によりかつて憂玉亭のあった西湖の畔に再移築され、今は「旧日暮亭」と称されている。

また、荘記には、「掬月楼」、「初筵観」、「星斗館」、「留春閣」の四つの楼閣が記載されている。掬月楼は現在の掬月亭のうち、管理棟・池に面する棟・茶屋の三棟であり、初筵観は北側の二棟である。そして、荘記が書かれた当時は、さらに北側に「庖厨」(台所)、「従者舎」(従者の控間)が続き、これら七棟の建物群が雁行型に北斗七星のように建ち並んでいたことから総称して星斗館と呼ばれていた。現在、従者舎・庖厨は現存しておらず、掬月楼と初筵観を合わせて「掬月亭」と呼ばれている。なお庖厨のあった付近に井戸跡が残る。留春閣は、今の小松亭のある辺りにあった中2階の建物であり、南湖を望みながら宴を催す所だった。掬月楼から留春閣にかけては湖岸沿いに渡り廊下があったようである。台所で作られた料理を御女中が初筵観や渡り廊下で留春閣まで運んでいたのだろう。

栗林荘は武芸を披露する場でもあり、荘記には「講武榭」と「愛駿謝」という屋根のある見晴らし台が記載されている。現存しておらず、今は地名になっている。

【樹木・草花】 荘記が書かれた時代と比べ、樹木や草花などの植生が大きく変化している所がある。

「旄丘」は南湖北岸で最も高い丘であり、今は大きな松の木が生え、藪化して人が立ち入ることは困難になっているが、荘記が書かれた当時は頂上の脩然台に栖霞亭があり、南湖一面を見渡すことができた。当時この辺りには

多くの桜の木が植わり、春は華やかな雰囲気にもまれていたようだ。栗林荘記や栗林園二十詠・二十境にはこの情景が表現されており、かつての美しい景色を想像することができる。現在、南湖の全景を見渡すことができるのは、東隅の飛来峰からであるが、旄丘・脩然台からは左右に渡って南湖を見渡せたと思われる。樹木などの景観は、南湖の南岸はあまり変化していないが、北岸部分は大きく変化し、松の緑が多くなっているように思われる。

西湖湖畔にある「脩竹岡」は、荘記が書かれた当時は長い竹で覆われ鬱蒼としていたようであるが、今は桜の木が数本植わる芝の丘となっている。かつて竹林であったことに因み、現在は竹が数カ所植えられている。

また、「百花園」・「橘園」は、現在は、梅林や茶畑になっているが、荘記が書かれた当時は、中に小路が通る花園となっており、牡丹、芍薬、藤、椿など四季を通じて色鮮やかな花が咲いていた。その南にはミカンなど柑橘類の木があったようだ。平井二郎によると、栗林荘の百花園は大名庭園に花園を作るようになった走りだという。

また、今は百花園跡が南梅林になっているが、荘記が書かれた当時の「梅林」は、北湖西北岸・梅林橋の北東側の現在は芝の原となっている所であった。北湖の湖面に梅の花が鮮やかに映り、湖風から梅の匂いが漂っていたことだろう。

総じていえば、今でも南庭は美しいが、荘記が書かれた当時に比べて緑が濃くなっており、その美は緑を基調にした落ち着いたものになっているのではないと思われる。しかし、かつて、南湖北岸は、桜の木が春は桜花のピンク、夏は繁った葉の濃い緑、秋は桜紅葉の黄と赤、冬は樹皮の黒へと四季の移ろいととも装いを変え、庭園の色彩も際立って変化したのではなかろうか。また、百花園は、春には様々な花が咲き乱れ、甘い香りに包まれていたのであろう。当時、南庭は現在よりもカラフルで彩色豊かな華やかな庭園であったように思われる。

(平井氏)

栗林公園は百花園で持っていたと思われるぐらい、当時の百花園は素晴らしかった。江戸の六義園は栗林公園の百花園がモデルであるとも言われており、現在の百花園は茶畑や梅林となっていますが、当時の様に色鮮やかな花や薬草のある百花園が復元できれば良いと思います。

(谷久)

田中さんは西日本放送ラジオセンター長時代に「栗林園二十詠」と「栗林二十境」の漢詩を朗読した特別番組を制作されていますが、その辺りのお話を

聞かせていただけますか。

(田中氏)

情景を想像するという点ではラジオと漢詩が似ていると思われましたので、節目の時に番組内で朗読することとしました。

五代頼恭公は、栗林公園の景色がどんなに美しくても、名前が付けられないと消えてしまうということで「六十景」が命名され、青葉士弘には「栗林園二十詠」を、後藤芝山には「栗林二十境」を作らせましたが、「栗林園二十詠」は叙情詩的、「栗林二十境」は叙景詩的という違いがあります。

「栗林園二十詠」や「栗林二十境」で表現された景色が音声で表現できればと良いと考えました。

(谷久)

群鴨池に春夏秋冬と四季の名前の付いた島がありますが、これは単に島が4つだから四季の名前を付けたのではなく、五行思想に基づいたものではないかと、書かれています。もう少し具体的にご説明いただけますか。

(田中氏)

春・夏・秋・冬はそれぞれ方角や色を表し、春は東であり青で青龍、夏は南であり赤（朱）で朱雀、秋は西であり白で白虎、冬は北であり黒で玄武、というように表わされます。中央の多聞島は黄で黄龍（麒麟）です。

多聞島は多聞天を祀り、多聞天と南湖の天女嶋に祀っている弁財天とは夫婦関係にあります。

多聞天は毘沙門天でもあり、武家の守り神であるように、北庭は明治時代に築庭されていますが、上手く神仙思想を発展させた江戸後期の本居宣長や平田篤胤の陰陽五行思想を取り入れていると思います。

(谷久)

確かに群鴨池の東の方向に春島、南の方向に夏島、西に秋島、北に冬島があります。栗林公園にあるものは、一つひとつにそこにある意味を持たせていると私は思っています。

ところで、この本には「瀬戸の都に咲いた華」とサブタイトルが付けられています。これはどういう意味なのでしょう。

(村井氏)

「栗林公園と歴代藩主」は文字通りですが、それだけでは寂しいので、明治時代に小沢圭次郎が栗林公園についての意見書に「～今日にあたっては実に高松市の名勝旧蹟、すなわち香川全县の国華としてこれを愛惜保護せざるべからずなり。」と記載していたので、この「華」という文字を引用することとしました。

(谷久)

これだけ内容の濃い本を作られるのには相当なご苦勞があったのではないかとお察ししますが。

(村井氏)

栗林公園は表面上の美しさだけではなく、お庭には思想が詰まっていると思います。これを理解するにはとても一筋縄ではいかなかった。また、園には茶道やお庭焼きなども関係しており、それら自体に奥深さがあることから、言わば栗林公園は多くの山を内在しており、栗林公園の全てを理解することはとても大変な事だと思いました。

(谷久)

ここで、会場の皆様から御質問をお受けしたいと存じます。時間の都合で全員の方のご質問をお受けすることは出来ませんが、どなたかご質問のある方いらっしゃいますか。

(質問1)

栗林公園の栗林を「りつりん」と読み「くりばやし」と読まなかった理由とは？

(村井氏)

この本には諸説あると記載しています。これは私個人の考えですが、五代頼恭公の時に作られた「栗林荘記」がありますが、これを「くりばやしそうき」と読むのは不自然ではないかと考えています。

(平井氏)

園内に栗の木が植えられていたから「栗林荘」と名付けられたと考える説もありますが、私は荘子の「遊於栗林（栗林において遊ぶ）」から「栗林荘」と

名付けられたと考えています。

(質問 2)

栗林公園は風水の考え方を取り入れているとのことで、東に東門を設け、多くの人を取り入れているのだと思うが、東に湖がないのは何故？

(平井氏)

園内の湖もやはり風水を取り入れており、風水では水は東南から流れ始め、次に西から北へ流れるためです。この風水の考え方は、レオナルド・ダ・ヴィンチもお城造りや森造りにも取り入れており、実際にこの風水の考え方に基づいて築城されたお城がフランスにもあります。

(谷久)

最後に是非、私から皆さんにお尋ねしたいことがありまして、私自身どうすべきか、どうすればよいかと考え続けていることなのですが、400年の歴史ある栗林公園は、未来に向かって400年守っていかなければならない。栗林公園は特別名勝です。国の宝の庭園です。その価値を知ってもらい、より以上に高めていくためには、今後どのようにすればよいでしょうか。

(平井氏)

とにかく皆さんが、栗林公園を愛し、誇りに思うことが重要だと考えています。

(村井氏)

現在の南庭の景観は、江戸中期の景観とは随分変わっている所があると思います。特に旄丘の辺りは、現在では松が多く植えられていますが、昔は桜の木が多く植えられ色鮮やかな景色が広がり、南湖一体も良く見通せていたと思われます。百花園も昔はもっと豪華絢爛であった。これらをCG(コンピューターグラフィックス)上で復元できれば面白いと思います。

本のあとがきにも記載しましたが、栗林公園は単なる庭園ではなく、高松城下の歴史・文化そのものであり、謂わば「高松の臍」だと考えています。そこで、今後は栗林公園単独ではなく、周辺も含めた観光地として広報できれば、良い観光資源になると思います。

(田中氏)

栗林公園ができる時に、香東川の流れを一本化したために、紫雲山西側の

鶴市地区では 51 回の洪水が起きていることも忘れてはいけないと思います。

現在は吹上から水が湧き出ていますが、昔は園内の池全体から水が湧き出ていました。近隣の製紙工場もなくなったので、昔のように池全体から湧水が出るようになれば、池の水がもっと綺麗になると思います。

所謂、三大名園も、偕楽園は元々常磐公園、兼六園も兼六公園、後楽園も後楽公園でしたが、これらの名称が公園から園になっても、栗林公園は公園のままです。この公園という名称の重要性については、高松栗林公園碑に記載されていますが、先程の小沢圭次郎は「高松の人は、碑文には見向きもしないだろう」と嘆いていたようです。やはり、高松市民は、公園という名称の意義について、もっと理解すべきだと思います。

栗林公園は、松平家が理想郷として造り上げた庭園です。この栗林公園を玉藻城や法然寺と組み合わせ「松平ワールド」として、連携した観光地として一緒に盛り上げていけば面白いと思います。

(谷久)

結びに この本のあとがきの一文をお読みしたいと思います。

【栗林公園について知ろうとすると様々な分野に繋がっていき、その一つ一つが奥深い大きな存在であるということである。栗林公園は単なる庭園でなく、高松城下の歴史・文化そのものであり、「高松の臍」である。

したがってその歴史を知ることは高松の街の歴史を知ることでもある。そういう意味で栗林公園は高松の街の象徴である。本書が高松、香川の文化や観光振興に少しでも貢献できれば幸いである。】

平井二郎さん、村井眞明さん、田中哲也さん、ありがとうございました。  
会場の皆さま、長時間にわたり、ありがとうございました。

以上で名勝指定 100 周年記念講演を終了させていただきます。